

「ソクラテスのエレンコス」への覚え書き

中畑, 正志

<https://doi.org/10.15017/1430728>

出版情報 : 哲学論文集. 30, pp.1-21, 1994-09-30. 九州大学哲学会
バージョン :
権利関係 :

「ソクラテスのエレンコス」への覚え書き

中 畑 正 志

ヴラストスによってソクラテスは面白くなった。

こう言わざるをえないだろう。ソクラテス（とりわけプラトンの初期対話篇に描かれるソクラテス）を論じる上で、もはや何人も彼の研究を無視することはできないというだけではない。現在の議論の活況¹⁾は、彼の研究のもつそれ以上の意義を、いやむしろ魅力を証するものである。ヴラストスの描いてみせるソクラテス像とそこに提示される問題とが、多くの研究者にとつて、議論に参加する意欲をかき立てる刺激的なものなのだ。

ヴラストスのソクラテスについての諸論考は、あちこちに断片的に発表されたのち、現在では二つの論文集、*Socrates: Ironist and Moral Philosopher* (Vlastos [1991]) と *Socratic Studies* (Vlastos [1994]) に収録されている。このうち前者の書はソクラテスをめぐる諸問題——アイロニー、敬虔、報復など——を扱いながら、基本的には、歴史上の存在としてのソクラテスとプラトンの初期対話篇に描かれるソクラテスとの同一性、及びこのソクラテスとプラトンの中期対話篇におけるソクラテスとの相違・対立とを論証しようとしたものである。そして、こうしたソクラテス像に対する礎石を与えるのが後者

の書での原理論的考察であり、⁽²⁾ 実際強く関心と呼んでいるのもこちらの議論であるといつてよい。その考察の中心的課題の一つはソクラテスのエレンコスの分析であり、それが同書でのもう一つの重要な課題であるソクラテスにおける知と不知の解明にも深くかかわり、むしろその前提ともなっている。

このように彼のソクラテス像を支えるヴラストスのエレンコスの分析に対して、その論理的明晰と目配りの広さへの共感とともに、私は彼の問題の論じ方自体にいくつかの疑念を禁じえなかった。⁽³⁾ この疑念は、のちの彼の一連の諸論文や最近の他の人々の議論に接することによっても解消されず、ときには増幅されることになったのである。以下では基本的な争点を構成した彼の論文 *Socratic Elenchus* (以下 *SE* と略記) に少し丁寧につき合うことによって、私の疑念の由来を明確化し、提起された問題自体の意義をもう一度私なりに確認したいと思う。もちろんあえてそうした作業を公の場に提出するのは、私自身はそのことに、個人的な消化不良の解消やヴラストスへの批判以上の意義を認めるからである。

1 ヴラストスが「ソクラテスのエレンコスの問題」 (*the problem of the Socratic elenchus* (*his italics*)) と呼ぶ問題はすでに広く知られている。——ソクラテスはまず対話相手自身の信念 *p* を命題として対話の場に引き出し、次にソクラテスが提出しその相手自身も同意する他の命題 *q*、*r* (の連言) から、当初の見解の否定 *not p* が帰結することを相手に同意させ、このことよってソクラテスは *p* を論駁したと主張する。しかし、この手続きに従うかぎり、ソクラテスが達成したと言いうるのは、対話相手の信念群の内的矛盾の暴露に他ならず、当初の信念 *p* が偽であることの証明ではない。しかしソクラテスはそれが偽であると、しかも対話相手に相対的な意味ではなく、端的に偽である、⁽⁴⁾ 確信していた。この確信はいかなる根拠に基づくのか。

ヴラストスのこの問題への解答とその効力を見るまえに、まず最初に次の基本的な点を確認しよう。この「問題」への形容は妥当であるか。すなわちこれが「ソクラテスのエレンコス」にとつてほんとうに「問題」なのか。

この「問題」がまさに「ソクラテスのエレンコス」の問題であると認定する背後には、ヴラストス自身の「エレンコス」の理解が存在する。彼は「ソクラテスのエレンコス」を、従来の誤りを訂正したより適切な記述として、次のように定式化する。

ソクラテスのエレンコスとは倫理的真理の探求 (a search for moral truth) であり、それを問いと答えによる反対的議論によって行うものである。ここで議論される立言は答え手自身の信念でなければならず、その立言の論駁は、その立言の否定が彼自身の信念のうちから導出されたときに、またそのときにのみ、なされたものとされる。(SE, 4)

この定式において、探求されるべき「倫理的真理」という概念は、いささか曖昧である。しかし、ヴラストスの立論からすれば、対話相手の当初の信念Pの偽であること、したがって含意的にはそのことを帰結する倫理的命題Q、rの真であることを指すことになる(SE, 11-12)。こうしてヴラストスは、「エレンコス」を探求 (search for) という前向きで積極的な意味において捉えるべきことを強調し、他方吟味・試験 (test)、論駁 (refutation)、叱責 (censure, reproach) などの否定的含意を極力薄めようとする⁽¹⁴⁾。

「エレンコス」(ἐλεγκος) という言葉に関する限り、これは特異な解釈と言わざるをえない。そのような積極的な意味はこの言葉の基本的意味ではなく、とりわけヴラストスが問題とするプラトンの初期対話篇においてはけっしてそのような意味では使用されていないのである⁽¹⁵⁾。しかし、この言葉の解釈の独特さは、直ちにそれだけでヴラストスの分析の大きな欠陥であるとは言えないであろう。ここで言う「エレンコス」は、プラトンの初期対話篇で活写されるソクラテスの対話・問答に対するとりあえずの「固有名詞」と考えればよく (cf. SE, 2) プラトン自身のその言葉の用法と相即している必要はない。私も以下では、とりあえず、この言葉を、ソクラテスの対話・問答を指すものとして使用しよう。問われるべきは、ソクラテスのエレンコスがヴラストスの解する意味でのエレンコスであったのかということである。

ヴラストスは、エレンコスの目的として倫理的真理の探求という局面を強調するが、しかし別の局面にも注意を払っては

いる。——エレンコスには二重の目標がある。(1) すべて人間はいかにして生きるべきかを見出す (discover) こと、および、(2) 答え手になっている当の人間をテストすること、すなわち彼が人が生きるべき仕方に従って生きているかどうかを明らかにすることである。そして前者の「哲学的エレンコス」と後者の「臨床的エレンコス」とは同じ一つのエレンコスの二つの局面なのである、と (SE. 10)。ただし、倫理的真理の発見と対話相手の生き方の吟味とが同じ作業の二つの局面であるということは、それほど明白なことではない。この二つの作業を架橋し同一の活動の別の局面というヴラストスの理解を可能とするのは、彼の言う「あなたの信じるところを語れ」というエレンコス遂行上の原則である。この原則は、問答を通じて検討される命題が対話相手自身がコミットしその生き方を拘束している命題であることを要求する。したがって、この原則によって、検討される命題と対話者の生き方との連動性が保証されている限り、倫理的真理 (倫理的命題の真偽) の探求は対話相手の生き方の吟味なのである。

ただしヴラストスの議論の舞台でスポットライトを浴びるのはエレンコスの前者の局面であることは、明らかであろう。後者の「実存論的」局面は、つかの間照明を当てられたかと思うとすぐさま影の部分に隠れてしまう。「ソクラテスのエレンコスの問題」が「問題」となるのもそのためである。彼の思考を次のように述べ直してもけっしてアン・フェアではない。——対話相手が不整合な信念を抱いたまま生きていることの指摘は、その人の生き方の吟味という目標をとにかくも果たしているかもしれない。しかしそれだけでは、もう一方の倫理的真理の探求という目的に照らしてみれば、不十分である。ところがソクラテスはエレンコスはその目的を達成できると確信している。するとそのようなソクラテスの確信の背景にはどのような理論的想定があったのかを探らなければならない。——

けれども、エレンコスの目的として、ヴラストスの言う意味での倫理的真理の探求・発見を中心的なものとソクラテスが考えなかったとしたら、先の「ソクラテスのエレンコスの問題」はソクラテスのエレンコスにとって問題ではないかもしれない。私はまずこの点について、疑念を抱いている。

2 ソクラテス自身はエレンコスをどのようなものとして理解していたか。——このことがもつとも基本的な形で表明されているのは、『ソクラテスの弁明』次の箇所である。

この私は、アテナイ人諸君、諸君に対して親愛の情を寄せ、諸君を愛している。しかし私は、諸君に従うよりは、むしろ神に従うだろう。そして私の息の続くかぎり、また私にその力があるかぎり、私は哲学すること（知を愛し求めること）をけっしてやめないであろう。諸君に勧告し、諸君のうちのいつ誰に会ったとしてもことの真相を明らかにすることをやめないであろう。私がつねづね語っているこの同じ言葉によつて。——世にもすぐれた人よ、君はアテナイ人であり、知と力において、もつとも偉大でもつとも誉れ高い国の一員でありながら、金銭ができるだけ多く自分のものになるようにといったことや、評判や名誉にばかり配慮していることを、恥ずかしくはないのか。思慮（知）や真実、そして魂をできるだけすぐれた（よき）ものにするとすることは、配慮せず、また心もちいもしないのか。

そしてもし諸君のうちの誰かがこれに異議を唱えて、自分はそのことに配慮していると主張するならば、私はその人をすぐには放さず、また私自身も立ち去ることをせず、その人に問いかけ、調べ、吟味するでしょう（*elencho*）⁽⁶⁾。そしてもしその人が徳を持っていると主張してはいるが、実際には持っていないと私に思われたならば、もつとも大切なことをもつとも軽んじ、よりつまらないことを不相応に大切にしているといつて、非難するでしょう。（*Ap.* 29D2-30A2）これは彼を死へと至らしめたあの裁判において、「そのような探求（*synopsis*）に従事すること、知を愛し求めることをやめる」という条件での放免という想定可能な提案に対し、ソクラテスが自分自身にはそのような生の選択肢はありえないことを主張するくだりである。ソクラテスが自分自身の活動の意義あるいは目的を語り明かすことがこれほど必要かつ重要な場面はほかには考えられず、また事実彼が自らの言行の目指すところをこれほど雄弁に語っている箇所も初期対話篇においてはほかには存在しない。ソクラテスのエレンコスの理解のためには、まずこの発言をその中心におかなければならない⁽¹⁰⁾。

ソクラテスはここで自らの哲学の基本的目的を(i)勸告(*parakatalethēnai*)と(ii)解明(*eudokimōnai*)という二つの局面で語っている⁽¹¹⁾。すなわち彼は、(i)魂ができるだけすぐれてある(よい)ことへの、あるいは徳への配慮を勸告し、(ii)またそうした配慮をしていると思ひこんでいる人に、事の真相を明らかにする、すなわち彼らのその思ひこみを吟味・論駁する⁽¹²⁾。このうち、ソクラテスの対話・問答を直接的に重ね合わせられるのは、まずこの(ii)の場面であろう。

ただしここでソクラテスは、ときとしてそう解されるのだが、(ii)吟味論駁を(i)魂のよき・徳への配慮の勸告、導きと別個独立な活動として語っているわけではないであろう⁽¹⁴⁾。(ii)は、(i)の勸告を受け入れない人々の存在する場合に発動する追加的オブションでもなく、また(i)へ向けての前段階の心的な整地作業でもない⁽¹⁵⁾。しかし、ソクラテスがエレンコスに与える説明はあくまで人の生き方の吟味・論駁という「臨床的」なものである⁽¹⁶⁾。

(i)と(ii)との関係を含めて、以上のソクラテスによるエレンコスの自己描写についてのすぐれた注釈は、プラトンの後期対話篇において与えられている。『ソピステス』では、ソフィストの技術の分析において、「分離の技術」の一部門としての「浄化の技術」から「エレンコス」が析出・特定される。それは、魂の醜さとしてのさまざまな無知のうち知らないのに知っていると思う「無知のある大きくて厄介な種類」に適用される技術である。この「エレンコス」の特定においてプラトンが念頭に置いているのは、自らが初期対話篇で描き出した「ソクラテスのエレンコス」以外ではありえない⁽¹⁷⁾。プラトンはそれを、相手の信念間の不整合を暴き出す方法としてより厳密な仕方⁽¹⁸⁾で記述し、それが対話相手自身による自らの信念についての再把握・再編制をもたらすことを明らかにしている⁽¹⁹⁾。そしてその結果、魂は「自分にまつわる大それた思ひこみ」から解放され浄化されるのである。ここで描写されたエレンコスも、相手の信念の不整合を暴き、そのことによって対話者自身による当初の信念の放棄へと導く「論駁」⁽²⁰⁾にほかならない。

『弁明』でのソクラテスの「自画像」と『ソピステス』でのプラトンによる再描写⁽²¹⁾とにおいてともに基本となつてのは、ヴラストスの理解とは異なり、その原義にむしろ忠実に、否定的、論駁的な活動として理解されたエレンコスなのであ

る(Cf. *Memo.* 83A-C)。すなわちそれはまず、ある特定の真理の探求の方法であるよりも、對話者自らの信念の不整合性の自覚に依拠した、ある思いこみの論駁、魂の浄化であり、そのことを通じて魂のよきあり方への配慮を促すことである。エレンコスの目指すもの、それは第一義的には、このような活動なのだ。

事実、初期對話篇におけるソクラテスの対話・問答の実態に照らしても、その多くは、ヴラストスの求める意味での倫理的真理の探求に従事しているとは言えないであろう。ソクラテスが自ら提出する(對話相手の立言Pの否定を導く)命題q、rに与える役割は、相手の不整合を暴き、そのことの自己認識を相手にもたらしことである。ソクラテスはそれが對話者に相対的ではない意味で真であることを求めてはいない。q、rの真であることを彼が積極的に主張したり擁護したりすることがきわめてまれなのだというばかりではない。ソクラテスにとつても真だと思われないような命題も論駁に利用しているのだ。だから多くの場合達成されるのは、その倫理的主題についての對話相手自身の信念の不整合の自覚と、それに基づくその人自身のPが偽であるという認識の生成である。したがってPの偽であることも對話の内部において相対的である。初期對話篇で散見される、ある特定の命題の真であることを目指して対話・問答するという主旨のソクラテスの発言⁽²⁾についても、その真理性は、對話問答による吟味・論駁に耐えうるということにおいて理解されなければならない。

もちろんソクラテスの対話が、単なる破壊であるというのではない。對話者の逢着するアポリア、あるいは信念の不整合の自覚は、それ自身が積極的意味を胚胎している。しかしわれわれはエレンコスの否定性を値引きせずそのまま受けとめなければならない(「脱構築」などという言葉で事柄を曖昧にするのはやめよう)。だからヴラストスのエレンコス像は、ソクラテス自身の認識と初期對話篇におけるソクラテスの対話・問答の実態とを適確に捉えてはいないと言わざるをえない。

とはいえ、以上の指摘によって、ヴラストスの問題提起の意味がすべて失われたわけではない。少なくとも『ゴルギアス』では、ソクラテス自身が明白にPの偽であること、q、rの真であることを主張し擁護している。(またそのことと直接関係するかどうかはともかく、先に引用した『弁明』の箇所でも、魂のできるだけすぐれてあることと並んで、真理(*ἀληθεια*)に

対しても（知（*epistēmē*）とともに）配慮すべきことが説かれていた。次にこうした「ソクラテスのエレンコスの問題」に直接かかわる論点を考察しようと思うが、しかしアプローチの方向は、これまでの考察の示すところに従うならば、次のようなものでなくてはならないだろう。——ソクラテスの哲学の目指すところは、魂のすぐれてあること（徳）への配慮を勧告することであり、そのなかでエレンコスの基本的役割は、相手の信念の吟味、不整合性の自覚に基づく論駁という否定的なものであった。このエレンコスの理解において、ソクラテスの真理主張はどのような意味を持ちうるのか。

3 基本的な事柄の確認から始めよう。ある人が不整合な信念を保持している場合、その人が自分の信念の不整合性の認識に基づいて一方の信念を偽であると認定することに問題は無い。信念とはその人にとって真であると思われることを信じていることであり、真であることを指向しているのである。それゆえ自らの信念の非整合性に気づくことは、すでに一方を偽と認め、放棄することへと歩を進めている。⁽²⁴⁾しかしヴラストスはそのような対話者に相対的な意味での信念の真偽性には満足せず、ソクラテスが求めたのは、それ以上の意味での真理性であると主張する。⁽²⁵⁾

なぜソクラテスの真理性の主張を整合性のみ依拠して理解してはならないのだろうか。おそらくその理由は、（1）それだけでは、不整合な信念群のうち、どちらを偽とするかはあくまで対話者の選択にゆだねられるということ、（2）（ソクラテスから見て）悪徳な人も、その内部では相互に整合的な信念を保持している可能性を排除できないということであろう。真理の整合的な理解がこのような結論を必然的に帰結するかどうかは、デイヴィッドソンの議論が示唆するように、⁽²⁶⁾自明ではない。しかも整合的な理解を採らなければ、真理（真偽）について整合性以外の基準の提示を求められるであろう（ヴラストスによってもそれにかわるソクラテスの真理概念が明確に提出されているとは言えない）。しかし整合性にかわる有力な選択肢である「対応説」は、「対応」すべき「実在」と、その「対応」の意味をどのように理解するかという点をめぐって、その困難がよく知られている。ソクラテスが問題とする倫理的領域においては、その困難はより深刻かもしれない。

ソクラテスが不整合性に基づいてある信念の偽であることを主張しているとすれば、むしろそのこと自体が整合的な真の理解へのソクラテスの傾斜を示している可能性に留意しておいた方がよい。もとより、ソクラテスはデイヴィドソンではない。ソクラテスは（少なくともプラトンの初期対話篇では）体系的な真理論を展開しているわけではなく、密かに隠し持っていたとも思われない。さらに、人間の信じることは（日常的な多くの信念をはじめとして）そのほとんどが真であるというデイヴィドソンと、多くの人々の倫理的信念を論駁するソクラテスとの間には、矛盾はないにせよ、ある隔たりが存在する。両者の関係を論じるためには、信念帰属における合理性や規範性（あるいはノモス性）についての注意深い考察が要求されるだろう。だからこの問題は、私自身への宿題としよう。

話を戻そう。ヴラストス自身の「ソクラテスのエレンコスの問題」への処方箋も、ある意味ではデイヴィドソンの見解と類似した面を持つ。⁽²⁶⁾ 彼は命題 q 、 r の真であることの根拠を、偽なる倫理的信念を持つているものは誰であれ、つねにその偽なる信念の否定を必然的に帰結するようないくつかの真である信念を持つている、というソクラテスの想定 A に求める。⁽²⁷⁾

しかしヴラストスの場合にこの想定自身を保証するものは、デイヴィドソン流の超越論的論証ではなく、その想定が数多くのエレンコスを通じてそれを生き延びてきたという経験的・帰納的な確証なのである(SEE 26)。

ヴラストスのこの解決は、しかし「ソクラテスのエレンコスの問題」によく答えているだろうか。ソクラテスが依拠する経験とは、彼のそれまでの対話活動そのものであり、その対話における対話者の信念間の不整合という事実であろう。⁽²⁸⁾ しかしそうした対話において一方の信念を対話者に相対的ではない意味で真、他方の信念を偽とする根拠が存在しないということが、まさに問題なのではなかったのか。⁽²⁹⁾ 過去のエレンコスの経験に訴えることだけでは、当初問われていた意味での真偽性の問題を先送り、というより後戻りさせたにすぎない。——対話者の内部での倫理的信念の不整合というその事態にソクラテスは何を見たのか。われわれはあらためてこの基本的な問題をあらためて問い直す必要がある。

以上のことを念頭に置いて、ヴラストスがとくに注目した対話篇『ゴルギアス』、とりわけソクラテスとカリクレスとの対

話を目を向けよう。先行する対話者のゴルギアスやポロスがソクラテスに反駁される様を観察したカリクレスは、ソクラテスの提出する (NOT P) を暗黙に含意する) 命題 q、r への同意が彼らの敗北を招いたのであり、彼らは当初の命題 P (具体的には「不正を行う方が不正を受けるよりよい」という命題) を保持し q、r の方を放棄すべきだと診断する (このように先行する対話者の q、r への同意を撤回し当初の立言を保持する対話相手の反攻を「カリクレス的方策」と呼ぼう)。このカリクレスの反転攻勢に対して、ソクラテスは続く議論のなかで、P の偽であることの「証明」を擁護しようとする。ヴラストスにとつて、このやりとりはまさに「ソクラテスのエレンコスの問題」を露呈させるものである。カリクレスの方策がとられたとしても P の偽であることをソクラテスが主張できるということの根拠こそ「ソクラテスのエレンコスの問題」で問われていたことなのだから。ヴラストスは次のように問題を展開する。たとえカリクレスもまた反駁されても、次々とスーパー・カリクレスが登場して前任者の P の否定を導くような命題への同意を撤回しカリクレスの方策を繰り返すことは可能である。そのような場合でも、ソクラテスがつねに P の偽であることを論証できるのであるか (SE, 22-23)。(ヴラストスは先の想定 A に依拠して、「できる」と答える。)

この場合エレンコスは、スーパー・カリクレスたちによるカリクレス的方策の反復という一種の無限反復性を構造的に、あるいは方法論的に許していることになる。たしかに方法論的に見ればそうかもしれない。しかしこの対話篇はそのようなエレンコスの無限反復性の問題に関与しているのであるか。われわれはここでカリクレスの演じる役割を、そのエレンコスの方法論的視点からだけでなく、この対話篇の議論の内容的視点からも確認しなければならない。

後者の視点からこの対話篇を見るとき、すでにゴルギアスとポロスを相手にした対話において、『弁明』でのソクラテスの勧告と深くかかわる事柄が繰り返し浮上していることに目をふさぐのは困難である。ソクラテスはゴルギアスに対して、弁論術は魂の善さとのかわりをもたない「迎合(へつらい)」にすぎないと批判する (465A-466A)。またポロスに対して、人の幸福は教養と正義の徳にすべてを依存し (470E)、魂の劣悪さこそ最大の悪であると主張する (477A-479C)。「不正を受ける

より不正を行う方がよい」という命題Pの偽の「証明」は、そうした主張からの帰結なのだ。カリクレスはこうした経緯を観察しながら、それに苛立ち、議論に介入してくる。次のようなソクラテスへの挑戦的な問いかけによって――

私たちはあなたがまじめになっていつていてと考えてよいのか、それともこれは冗談だとしてよいのか、いったいどちらなのかね。ほかでもない、もしあなたがまじめであるとしたら、そしてあなたの言っていることがほんとうだとしたら、われわれ人間すべての生き方はすっかり転倒してしまっていることになるのではないか。(481B10-C4)

カリクレスはそれまでの対話の経緯から、われわれの生のあり方を転倒させかねないソクラテスの哲学の持つラディカルさを察知している。そしてソクラテスもまた、そのような嗅覚に基づくカリクレスの反発が、ソクラテスの哲学そのものへの反発であることに気づいてきた(481C-482C, 487C-488A)。事実、カリクレスはそのことをはっきり表明している(484C-486D)。彼はソクラテスの吟味・論駁の営みを否定し(*parousai... eleyouras* 486C4, *gnaiou oix eleyouras* 486C8)、「実務的なことを修める」ことを(486C4)、「生活、の資、や評判、や他の多くのよきものを備えた人々」を見習うべきことを説く(486D1)。権勢ある者には「節制や正義ほど醜く害になるものはほかにはない」のだから(491B)、「と。これは先に見た『弁明』におけるソクラテスの哲学、すなわち(i)金銭や評判ではなく徳こそを配慮せよという勧告と(ii)吟味論駁という活動への真っ向からの挑戦である。すなわちカリクレスの挑戦への応答は、ソクラテスにとつて哲学という営みの擁護そのものにほかならない。だからこそ、この対話において「人はいかに生きるべきか」という「もつとも切実な問題」がそれとして明確な形で浮上し(492D, 500C)、争われることになるのである。

こうした争点の深化・先鋭化への転轍機としてのカリクレスのこの役割は、先に見たエレンコスの方法論上でのカリクレスの役割と密接に関連している。ゴルギアスやポロスが「気おくれ」や「羞恥心」のために同意してしまったq、rを改めて拒否することは、それだけいつそう、pかnon-pかという選択を、より根本的に――生のあり方、幸福や徳の理解へと、そして魂のあり方の問題にまで遡って――考えぬくことを要求するのである。単に形式的に見れば、カリクレスはのちのそ

パー・カリクレスたちにカリクレスの方策の繰り返しの可能性へと途を開いている言うことができるかもしれない。しかしカリクレスのもたらした争点の深化は、思考の可能性については途をせばめ、根本的な選択を迫っているのである。

争点の深化・先鋭化に呼応して、カリクレスの信念の不整合な状態の意味も、より厳しく論定される。対話篇の最後において、ソクラテスは「他の説が次々と反駁されていく (*ἀλλογοῦνται*) なかにあってただ一つの説が微動だにせず残っている」(527B2-4)と総括したのち、次のように告げる。——「人間が何にもまして配慮せねばならぬ (*πρόσθεον*) のは公私いずれにおいても、よき人だと思われることではなく、実際によき人であるということなのだ」(527B5-7)。ここでいう「よき人」とは、すぐに換言されるように、正しき人であり、また「徳をおさめている」人である。これに対して、カリクレスの陥っている現在の状況はつぎのように描写される。

われわれがいま自ら暴露しているような状態にありながら、それでいて何かひとかどのものであるように競いたつのは、まことに見苦しいことなのだから。現に、われわれは、同じ事柄について考えながら、それももつとも大切なことが問題とされているというのに、一度たりとも同じ信念を保てなかつたではないか。われわれの無教養ぶりはそれほど情けないところまで来ているのだよ。(527D5-E1)

ここでの鮮明な対比的関係に注目しよう。徳をおさめて真によき人であることと、「もつとも大切なこと」(いかに生きるべきかという問い)をめぐって不整合な信念を抱いている状態との対比。後者の状態にあるカリクレスに対して、ソクラテスは「正義を始め、そのほかの徳をおさめつつ、かつは生きかつは死ぬというこのような人生のあり方がもつともすぐれたものである」というこの言説に従うことを勧めるのである(527E1-ad fin.)。翻つて言えば、カリクレスに見られる倫理的信念の不整合な状態は、単に特定の主題について情報の不足とか、想念の曖昧さということにとどまず、むしろそれはよき(すぐれた)人であること、徳ある人であることへの配慮の欠如を露呈させているのだ。エレンコスとは、対話相手の倫理的信念の不整合を暴露することによってその人の徳への配慮の欠落を示し、同時に不整合の自覚に基づく信念の整合化を指向さ

せることを通じて徳への配慮を勧告するものなのである。『ゴルギアス』のこの終幕は、相手の信念の吟味論駁という活動が、そのまま徳への配慮ということへの勧告、すすめへと連絡し、先に見た『弁明』でのソクラテスの自らの活動の描写に実践的裏づけを与えていると言えるだろう。(しかしまさにその『弁明』での態度の堅守と擁護が、ソクラテスの裁判の行方を不気味に暗示しているのであるが。)

4 以上の経緯の確認は、pが偽であるというソクラテスの強い主張に対しても、別の考察の可能性を与える。ソクラテスの「真」であるとする信念q「不正を受ける方が不正を行うことよりもよい」は、次のような仕方では保証されている。

「いささか無遠慮に言うことを許してもらえらば、それは鉄と鋼のような言説(λογος)によって拘束され、縛りつけられているのだ。…この堅い言説の縛めを、…打ち破って解き放つのではない限り、いまぼくが述べているのと違ったことを主張してみても、それはしよせん、正しい言説(xalos logos)とはなりえないであろう。」(508E7-A4)

言説qは、そうした「鉄と鋼」の言説によって拘束されているかぎりでは正しいとされる。反駁されずエレンコスを生き延びた命題は、こうして他の言説との整合的関連のなかでその正当性が主張されているのである。ここでも、特定の命題が真であることの保証はあくまで他の言説との整合性であり、そうした保証を与える言説もまた吟味・論駁を生き延びるかぎりでは「真」であることにはかわりはない⁽³³⁾。しかしこのカリクレスとの対話では、そのようにして当の命題を拘束している言説とは、同時に、人がいかに生きるべきか、いかなる魂のあり方が幸福かということについてのソクラテスの哲学を支える根本的な洞察であり、かつまた吟味・論駁という彼の活動そのものを支えている信念でもあるのだ。ここで、pの偽、q、rの真はそのような論脈にある。ヴラストスはそのような意義をもつ「鉄と鋼の言説」を、エレンコスに対するその方法論的視点から、ほかの対話篇での反証命題q、rと同じレヴェルに扱っているが、しかしそこには過剰な単純化がある。

ヴラストスはこれまで検討してきた「ソクラテスのエレンコス」という論考を論文集に再録するに当たってそこに「Method

is aiii」という副題を付した。この言葉は美しい。彼のこの問題意識によって、ソクラテスのエレンコス全体のもつ哲学的問題が捕捉されたことはたしかである。しかし、ソクラテスはヴラストスの投網をすり抜ける。私にとってこのソクラテスこそ魅力的なのだ。

この研究は一九九四年度稲盛財団奨学金および同年度文部省科学研究費補助金による成果の一部である。

* 文献の指示は次に挙げられる論文をのぞいて末尾の文献表に従っておこなう。またプラトンの著作については、基本的に「Liddle, Scott & Jones, *Greek English Lexicon*」の略表記に従う。

** ヴラストスのこの論文は「まず *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 1 (1983) に掲載され、のちに Vlastos [1994] に再録された。この際にくつかの訂正と付加がおこなわれているので、以下の参照箇所の指示は、後者のページづけに従っている。(田中享英訳「ソクラテスのエレンコス」『ギリシア哲学の最前線』東京大学出版会、(1986), 37-72 は初出時の形からの翻訳である。)

註

(1) 数多くの(しかし残念ながら紙幅の制約のため以下ではほとんど立ち入ることができない)ヴラストス以後のソクラテス関係の文献の列挙のかわりに、半ば個人的な経験を述べよう。今年(1994年)の日本哲学会において二日目の第3会場での発表は3本とも古代哲学関係の研究によって占められたが、しかし司会者の一人が正しく指摘したように、そこでの議論はむしろ特定の主題をめぐるコロキウムの様相を呈していた。その主題とはソクラテスのエレンコスおよび彼の探究する知のあり方にかかわる問題である。(さらに二週間後に行われた西洋古典学会でも同じ主題をめぐる発表に出会うことになる)。それらの個々の発表から学ぶところは少なくなかったが、研究者たちのこのような関心の集中もまた、印象的であった。

(2) "[SE] is foundational for my interpretation of Socrates" (Vlastos [1991], 111, n.23). ; "[Socratic Studies] laid the

basis for his understanding of Socrates" (SE, front page).

- (3) 私は中畑 [1989], 134-7に「おどろく」や「奇り」道的にはあるが、この疑念の一部に言及した。
- (4) この限定の意味については、注(25)を参照。
- (5) "First and foremost elenchus is search." (Vlastos' italics), "its object is always that positive outreach for truth", (SE, 4).
- (6) "The adversary procedure which is suggested (but not entailed) by the Greek word [ἐλέγχος] (which may be used to mean "refutation", but may also be used to mean "testing", or, still more broadly, "censure", "reproach") is not an end in itself", (SE, 4).
- (7) 辞書(*Greek English Lexicon*)が ἐλέγχος に与える意味は「中性名詞として『reproach, disgrace, dishonor』、男性名詞として『I. argument of disproof or refutation, II. cross-examining, testing, scrutiny, esp. for purpose of refutation』である。この語(およびその動詞形 ἐλέγχειν)のソクラテス以前の用法については『Furley [1989] に簡単な概観が与えられている。』
- (8) ヴラストスも「エレノコス」が中・後期の対話篇においてはそれが純粹に否定的意味において使用されることを認める(SE, 5)。しかしヴラストスが初期に分類する(移行期とされる *Euthd.*, *Hp. Ma.*, *Lys.* をのぞく)対話篇(*Ap.*, *Chrm.*, *Cri.*, *Euthphr.*, *Grg.*, *Hp. Mi.*, *Ion.*, *La.*, *Mx.*, *Prt.*, *R.I.*, ...)彼の執筆年代の区分については『Vlastos [1994], 135 を参照。私はこの区分に全面的に従うわけではならぬに範囲を限定しても、ἐλέγχος の使用される10例のうち「反駁・論駁」の意味よりもむしろ「吟味」の意味がふさわしいのは唯一 *Ap.* 39C7 「生の吟味」(*ἐλέγχος τοῦ βίου*)だけであり、しかもその生はソクラテスに有罪票を投じた人々の生であるから明らかに否定的合意を伴っている(ゆえに「探求」とは訳せない)。また ἐλέγχειν の使用される44例のうち35例は「反駁・論駁」の意味であり、またそれ以外でも *Ap.* 29E5, *Chrm.* 166E2 は「吟味する」「論駁する」の両方の翻訳が可能で、「詰問」と「examine」の二つの傾向に分かれて58 (*Ap.* 29E5 の訳については次注も参照)。「反駁・論駁」よりも「吟味」の意味がふさわしいと思われるのは *Ap.* 18D5, 7, 39D1, *La.* 189B2, *Prt.* 331C6, D1 の6例であるが、このうち *Ap.* の3例は明確に否定的な含意を含んでいる。*Prt.* 331E1 が唯一「証明する」と訳しうるであろう。(以上の使用例のカウントは『Brandwood [1976] に依拠した)。名詞、動詞とも用例の圧倒的多数が人あるいは人の生き方をその対象(目的語)に

とっていることも注意に値する。

(9) この言葉を「論駁」と解することも可能である。実際ヴラストスはこの語を“refute”と訳している(SE.9, T13)。(本稿でのプラトンからの引用は、『岩波』プラトン全集』に準拠し、また『ゴルギアス』については、中央公論社『世界の名著プラトンI』の藤沢訳も参照した。)

(10) 不思議なことにヴラストスのこの箇所扱いはきわめて簡単である(Vlastos [1994] 全体を通じてSE.9だけ)。

(11) *Ap.29D5, ov̄ mē parōgmatē filosofōu kaī ūtu paraxelōyēnos xtl. o kaī* は説明的である。

(12) 魂のすぐれてあることへの配慮は、徳への配慮と換言されてくる(*Ap.31B5, 41E4-5, cf.29E2-5, 30B2-3*)。

(13) *Ap.29D6, endekxūyēnos* は田中 [1974] とともに29E3 以下で述べられる吟味・論駁によつて相手の真実の姿を明かすことを指すと解する(*cf.23B7 endekxūyēnos ōti ouk ēsti sophos*)。Burnet [1924], *ad loc.*, Hackforth [1933], 114 などと同様な解釈であろう。

(14) もっともここでのソクラテスの昂揚した語り方は(i)と(ii)が別の活動という誤解を招いてきた(たとえばGomperz [1905], 107; Ryle [1966], 177-178)。こうした見解に対する反論として、Hackforth [1933], 112, Reeve [1989], 121-124 を参照。

(15) 次の二つの箇所を比較せよ。(a)「諸君にとつて、この私の神への奉仕以上に大きな善は、まだこの国のなかに生じたことはないと思つている。実際、私が歩き回つて行つてゐることといえば、ただもつぱら次のこと、すなわち、諸君のうちの若い人たちにも年寄りの人たちにもひたすら魂をできるだけすくれたものにするよう配慮するように、説得することなのだ。」(*Ap.30A5-B2*)、(b)「人間にとつては、徳その他のことについて毎日談論するといふ、このことが、まさに最大の善であつて、私がそれらについて問答しながら自分と他人とを吟味しているのを諸君は聞かれてゐるわけである」(*Ap.38A1-6*)。——ソクラテスの活動(哲学)は、(a)では魂のすぐれてあることへの配慮の説得(Ⅱ(i))として、(b)では徳をめぐる対話・問答、吟味(Ⅱ(ii))として(ともに最大の善として)記述されている。両者は同じ活動の別の記述といえるだろう。この点についてはさらに十二十三頁を参照。

(16) 本稿での「吟味」と「探求」との相連については当面のことだけを注意しておく。「吟味」とは吟味される者のありのままを明らかにすると言ふ意味であり、たとえば信念の不整合な状態の暴露はそれに該当する。したがつて、それは吟味される者と相関的な営みとして理解可能である。これに対して「探求」は、ヴラストスがそつてであるように、ある普遍的真理の発見を目指す。した

がって、信念の不整合な状態の判明することは、もし「吟味」と同時に遂行されていると考えることができたとしても、それだけでは「探求」は成功を収めてはいない。

(17) この「氏素姓高貴な（ソフィストの術）」の記述を額面通りソフィストの方法の記述であると解釈した Kerfered [1954] の主張は多くの人々よって批判、否定されている。この論争の概観とここで「エレンコス」がソフィストの術として記述されたことの意味については、藤沢 [1976]、「補注 B」178-180を見よ。

(18) 「もともと確實不動の見解を持っている相手ではないから、彼らはその者の信念を容易に吟味していき、言論の力よって、そうしたさまざまな信念を一点に導いて相互につきあわせてみる。そして、そのようにしてつきあわせたいうで、それらの信念が同じ事柄について、同一のものとの関係において、同一の側面において、同時に、お互いに相反する主張をなすものであることを示す。」(Sph. 230B5-8)

(19) 「これに対して相手の者たちは、この事実を見とって、自分自身に対して腹を立てる一方他人に対しては穏やかになり、かくてこのやり方によつて、自分にまつわる大それた頑固な思いこみから解放されることになる。」(Sph. 230B8-C2)

(20) こうして浄化された状態を、登場人物テアイテトスは「魂の、もつとも、すぐれたもつとも、思慮深い状態」とさえ表現している (Sph. 230D5)。そしてこのことの後期対話篇における実践的例証は、『テアイテトス』においてソクラテスの吟味・論駁を受けたテアイテトス自身にほかならない。この対話篇の末尾でソクラテスは語る——「君はいま吟味を受けたおかげで、もつともよいものをもつて充たされることになるだろうし、またもしおながが空のまま生まれぬものがない場合には、君は君の知らないものを知っていると思つたりしないだけの思慮深さを持つことによつて、一緒にいる人を悩ますような重荷がいちだんと少なくなり、人々とはいつそうよく折り合つていけることになるだろう。」(Th. 210B1-C5)

(21) ここでの描写を初期対話篇での「ソクラテスのエレンコス」に重ね合わせることに對して、ウラストスはこれが初期対話篇でのエレンコスのすべてであると語られているわけではない、と反論している (SE, 17-18——この反論は Vlastos [1994] への再録にあたって注から本文に格上げされた。邦訳ではその注は省略されている)。たしかにこれがソクラテスのエレンコスのすべてであると語られているわけではないが、しかしこのような仕方でも特定されたことは、エレンコスの本質的部分がこのような魂の浄化としての論駁にあるというプラトンの理解を告げるのではないか。ソクラテスの対話・問答を想起させるこの営みがそれまでのソフィ

ストの技術の分割とは異なっており、「獲得の技術」のなかではなく、「分離の技術」とりわけ「よいものから悪いものを引き離す」技術としての「浄化の技術」のなかで初めて析出されたことは、無意味とは思われない。

- (22) 対話者の立言の否定を含蓄する q 、 r へのソクラテス自身の関与については、それぞれの具体的な例に応じて解釈が分かれるであろう (e.g. *La.* 198D-199E, *Pr.* 351C-E)。しかし少なくともソクラテス自身が信じていない命題を吟味・論駁に利用した明瞭な例として、たとえば *Euthphr.* 6B1-C7 での「神々が相争う」という命題を挙げうる。ヴラストスはこの箇所を q 、 r が対話相手自身から導かれた信念である場合のエレンコス(「間接的エレンコス」として分類し、彼が分析する「標準的エレンコス」から除外している (SE, 12, n. 35))。しかしヴラストス自身が認めるように、いずれのタイプのエレンコスの場合も、 q 、 r はその出所は異なつたとしても対話相手の同意する命題であり、その身分は論理的観点からは同等である以上 (SE, 12, n. 35)、そうしたエレンコスの区別そのものが一種の論点先取ではないか(「エウテュプロン」の同箇所でもソクラテスもとりあえずはその前提に同意してみせてくる (6A9-B2))。

- (23) そうした箇所として *Ap.* 21Bff., *Crit.* 46B, *Hp. Mi.* 369C-E, *Euthphr.* 11D-E, *Crat.* 453A-B, 486E1f. などがしばしば挙げられる。

- (24) Williams [1965/1973], 169.

- (25) SE の初出の語彙は「このことが明確に主張されてきた: "What Socrates must do—and what, I shall be arguing, he is convinced he does—is prove p not just false for the interlocutor, but false." 40 (his italics)」。この箇所は再録にあたって消去されている(一)。しかしヴラストスの立論に従う限り、初出時のこの主張はいぜんとして完全に彼自身の主張でなければならぬ。

- (25) この点に関するデイヴィッドソンの主張がもつとも明確に打ち出されているのは、Davidson [1983/1986] であるが、Davidson [1984] に収録された諸論文もそれぞれこのテーマとかかわっている。

- (26) デイヴィッドソン自身 Davidson [1985] では SE を高く評価し、彼自身の整合説的真理論をヴラストスの想定 A と重ね合わせている (Scaltras [1989]) はヴラストスのソクラテス解釈を基本的に受け入れた上で両者の相違を考察しているが、表面的)。

- (27) ヴラストスはさらに二つの想定(B ソクラテスの倫理的信念の体系は、彼が支持するものである限り、つねに整合的である。C

- ソクラテスの倫理的信念の体系は、彼が支持するものである限り、つねに真である（をソクラテスあるいはプラトンに帰すが、最も重要なのはこの想定Aであり、この「覚え書き」での考察にとってもそれを検討すれば十分である。
- (28) ヴラストスはソクラテスの倫理的知識の源をエレンコス以外には求めないことを強調している (SE, I7, n. 51; Vlastos [1985/1994], 55-56)。
- (29) Kraut [1983], 12; Brickhouse & Smith [1985], 189。これも同様の疑問を提出している。
- (30) このような限定を付すのは、ヴラストスの求める倫理的命題の真理性の問題が、想定Aを介して、エレンコスを生き延びる（エレンコスを通じて放棄されなかった）といった経験的な正当化の問題へとすべて翻訳可能ならば、真であるとは、過去の経験による確証の問題となってしまうからである。事実ヴラストスは、のちに想定Aから（信念の）真偽の限定を消し去ってしまった（Vlastos [1985/1994], 56-57）。では、この弱体化された想定は、信念間の整合・不整合以上の（ヴラストスの求める）、Pの偽、g・rの真をどのように保証するのか。過去のエレンコスにおける信念の整合性の保持という経験はなぜそのことによつて、整合性以上の意味での真理性を主張しうるのであろうか。（ただし、これは単なる反語的疑問ではない。この問題は Vlastos [1985/1994] でソクラテスに帰される知の概念 ‘*epistemically justified fallible knowledge*’ の問題性とも関係するので慎重な扱いを要するであろう。）
- (31) *Grg.* 479E8. ヴラストスは *καταπελάττειν ἀποδείκναι* という言葉を非常に強い意味で解し、この「証明」が対話者の不整合の指摘や対話者に相対的な意味での論証ではあり得ないと主張する (SE, 19-20)。するとこの言葉は、アリストテレス的「論証知」と類似したもので、すなわち対話に相対的ではない真なる前提からの帰結ということを表現することになるだろう。そのような解釈は、これもまたアリストテレス的に、エレンコスの問答・対話的性格への批判ということへと連動する可能性がある。はたしてこの言葉自体が、ヴラストスのような解釈しか許さないかどうかは疑問である。ポロスによる q、r への同意（彼がそれを真であると認めること）を前提として、p の偽が「証明」されたと言明することも可能だからである。カリクレスに対する p の偽であることの論証はむしろそのようなものである。第4節、及び注(33)を参照。
- (32) この1人称複数の意味については Dodds [1959], ad. loc. のコメントが正しく、ソクラテスまでも含める Kraut [1983], 69 に対し *ἡμῶν* Vlastos SE, 27, n. 68 の反論は正當である。
- (33) 506C 以下からのソクラテスによるそれまでの議論の要約を参照。とりわけ、結論に到るまでに挿入される次のような言葉に注意

せよ。「君はほくが話して行くのを聞いていて、ほくの言うことには正しくない点があったらまったをかける」といことだけはしてへれたまえよ。」(506B7-C1)「かくて、ほくとしてはいさした事柄については以上述べたとおりであると定め(τίθεμαι)」、それらは真であること主張したり。しかるに、われらが真であることれば(ἐι δὲ ἐστὺν ἀληθῆ)……(507C8-9)「われわれとして、いま言われた説を反駁するものか(ἢ ἐξελικτέος)……それと、その説が真であることれば(ἢ ἐι ὅτι οὐκ ἀληθῆς ἐστὺν)」、それら互が帰結するのかを考察してみなければならぬ。」(508A8-B3)「それ以上の事柄がこの通りであるとすれば、それは(genitive absolute)』(508C4)。こうした表現にみられる自らの信念に対するソクラテスのある種の仮説的意識、あるいはあらゆる論駁の可能性への開かれた態度を、すべて總括であるとせよ、とせば、おなじことであろう。

大體表

- Brandwood, L. [1976] *Word Index to Plato*. Leeds.
- Brickhouse, Th. & Smith, N. D. [1984] "Vlastos on Elenchus", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 2, 185-195.
- Burnet, J. [1924] *Plato's Euthyphro, Apology of Socrates, and Crito*. Oxford.
- Davidson, D. [1983/1986] "A Coherence Theory of Truth and Knowledge", in *Truth and Interpretation*, ed. by E. Lepore, 307-319. (中谷信春訳「真理と知識の弁論」『現代思想』1989, no. 6)
- [1984] *Inquiries of Truth and Interpretation*. Oxford.
- [1985] "Plato's Philosopher", *The London Review of Books*, vol. 7, no. 14, 15-17.
- Dodds, E. R. [1959] *Plato Gorgias*. Oxford.
- Furley, D. [1989] "Truth as What Survives the Elenchus", in his *Cosmic Problems*, 35-46.
- Gomperz, Th. [1905] *Greek Thinkers*, vol. II. (English tr.). London.
- Hackforth, R. [1933] *The Composition of Plato's Apology*. Cambridge.
- Kerferd, G. B. [1954] "Plato's Noble Art of Sophistry (Sophist 226a-231b)", *Classical Quarterly* 48, 84-90
- Kraut, R. [1983] "Comment on Gregory Vlastos, 'The Socratic Elenchus'", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 1,

59-70.

- Reeve, C. D. C. [1989] *Socrates in the Apology*. Indianapolis.
- Ryle, G. [1966] *Plato's Progress*. Cambridge.
- Vlastos, G. [1985/1994] "Socrates' Disavowal of Knowledge", *Philosophical Quarterly* 35, 1-31, reprinted in Vlastos [1994] (cited in the latter pagination).
- [1991] *Socrates: Ironist and Moral Philosopher*. Cambridge.
- [1994] *Socratic Studies*. Cambridge.
- Scalzas, Th. [1989] "Socratic Moral Realism: An Alternative Justification", *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 7, 129-150.
- Williams, B. [1965/73] "Ethical Consistency", in his *Problems of the Self*. Cambridge.
- 田中美知太郎 [1974] 『原典プラトン ソクラテスの弁明』(改訂版) 岩波書店。
- 藤沢令夫 [1976] 『プラトン全集 3 ソピステス・ポリテイコス』, 岩波書店。
- 中畑正志 [1989] 『倫理学』の成立をめぐる基本問題』、『転換期における人間』 倫理とは (岩波書店) 所収 147-175°。

(本学文学部助教・西洋哲学史)